

絵のスタイルから昔話絵本を考える

—「かさじぞう」を例として—

武田 京子*

(1992年12月11日受理)

Kyoko TAKEDA

A Consideration on Picturebook of Folktale: Through Drawingstyle

昔話絵本「かさじぞう」の絵に着目し、読者の絵に対する好みとストーリーの持つ雰囲気との関わりについての研究である。

絵のスタイルに重点をおいた調査と、文章も含めた調査を行なった。「ストーリーの持つ雰囲気が出ているか」よりも、こども向けに「無難な」「かわいらしい」ものが、好まれることがわかった。

〔キーワード〕 昔話、絵本、絵のスタイル、ストーリーの持つ雰囲気

1. はじめに

絵本は、様々な児童文化財の中でも「読んでもらうことが必要」ということから、親と子のかかわり、コミュニケーションの度合いを非常によく示すものである。しかし、絵本を購入する場合には、「絵がかわいらしくて子ども向きだから」、「有名な出版社のものだから」、「値段が手ごろだから」というような、絵本が児童文化財として果たす役割と無関係な視点から選択している場合が多い。子どもが読書活動の出発点で出会う絵本は、文章、絵、色彩、造本等の点に細心の注意を払い選択する必要がある。なぜならば、絵本は、想像力や感性を育てるのに非常に有効な児童文化財だからである。

絵本は、絵のみ、或いは絵と文章が融合して創られた「芸術作品」であり、読者の関心は、絵（挿し絵）に比重が多くかけられ、絵本を選択する際に絵が指標になる場合が多い。しかし、その場合、絵のかわいらしさに関心がゆき、絵の質、芸術性、ストーリーとの適合性などは、無視されてしまう場合が多い。

そこで、本研究では、昔話「かさじぞう」の絵本を例として、ストーリーの持つイメージにもっとも適合した絵はどういうものか、を明らかにすることによって、情操を豊かにし、イメージの世界を広げて行くことを可能にするような読書環境を整備していく為の一つの手がかりとしたい。

*岩手大学教育学部家政科

II. 研究方法

「昔話に登場する人物（動物）たちは、善か悪か、強か弱か、いじわるか優しいかなどの、人間のもつ最も根源的な性格特徴をもつ元型をくっきりとわかちもっています。このような性格特徴を持つ主人公たちが、それらを極限までむき出しにしてぶつかり合うストーリーは、子どもの自己中心的思考と強く触れ合います。」¹⁾と佐々木が述べるように昔話のシンプルでわかりやすい筋立てと素朴な論理は、幼い子どもが想像の世界を作り出していくのには有効である。

「かさじぞう」の物語は、様々なかたちで全国各地に伝えられており、貧しいが、誠実で心優しい老人夫婦が、他人に親切をすることによって幸福を得るといふ物語である。「貧しい」という言葉に現実味がなくなり、自然を破壊する、人を押し退けてのし上がり、わが身のことばかり考えていく人間の多くなった現代において、忘れがちになるものを「かさじぞう」は思い出させ、イメージを大きく膨らませることも可能である。

「かさじぞう」の絵本は、筆者が手にしたものでだけでも52冊あるが、本研究では絵本着目し、絵のスタイルによって5のタイプ別に分類した。既に「かさじぞう」のストーリーを知っている者（大学生・中学生）についてはスライドを用いた調査（量的測定）を行い、ストーリーを知らない者（幼児）については、家庭内に5タイプを代表するの絵本を常置してもらい、日常の読書活動の中でどのように読まれるか調査（質的測定）をおこなった。

「かさじぞう」の絵のスタイル

- ①写実的に描かれたもの（新井五郎絵、岩崎京子文 ポプラ社）
- ②アニメ・漫画風に描かれたもの（成田マキ絵、平田昭吾文 永岡書店）
- ③素朴に柔らかい色彩で描かれたもの（遠藤てるよ絵、吉沢和夫文 第一法規）
- ④場面ごとに人形や背景を構成し写真撮影したもの（高橋悦雄写真文 小学館）
- ⑤水墨画風に描かれたもの（赤羽末吉絵、瀬田貞二文 福音館書店）

上記のスタイル別代表例の絵本について、阪本²⁾の評価尺度を参考にして以下の10項目について評価を行い、点数化可能な(3)、(4)、(6)、(7)、(8)、(9)、(10)について、それぞれの絵本の得点を算出した。なお、(10)についてはズレのあった場合に1件につき減点1とした。

評価項目

- (1) ページ数
- (2) ストーリー
- (3) 言葉遣い（雰囲気・リズム感・地文と会話文・擬声語、擬態語の使い方・標準語と方言）
- (4) 文章の長さ
- (5) 一段落に対応する絵の数（画面割りのバランス）

- (6) 描画（ストーリーとの調和）
- (7) 色彩（ストーリーの雰囲気合っているか）
- (8) 絵本全体（造本、構成など）
- (9) 絵と文章のバランス（絵と文章の配置、量）
- (10) 絵と文章のズレ（一画面の絵と文章の食い違い）

評価結果（表1）

表1 各絵本についての評価

	3 言葉	4 長さ	6 描画	7 色彩	8 構成	9 バランス	10 ズレ	得点合計
ポプラ社	5	4	4	5	3	5	- 1	25
永岡書店	1	1	1	1	1	2	- 1	6
第一法規	4	4	4	5	5	5		27
小学館	4	3	3	5	1	5	- 2	19
福音館	5	4	5	5	4	5		28

合計得点が最低となった永岡書店刊は、『アニメ昔ばなしシリーズ』のなかの1さつであるため、シリーズとしての体裁を整えるために、登場する動物を増やしたりストーリーの複雑化をおこなっている。また、幼児向きのものによく見られる傾向であるが、動物を擬人化（二本足で立つ、もちつきをするネズミ、はしでごちそうをつまむきつね）している。このことは、民話の持っている素朴さを失う危険性につながる。

小学館刊は、『NHK・メルヘンシリーズ』全20巻の1冊でありページ数が統一されている。永岡のものとは逆に単純化が行われ、おじいさんが帰宅したのち地蔵が来訪するまでの場面が描かれていない。絵本は、表紙・見返し・扉・本文・裏表紙という要素によって構成されるが、これは、裏表紙にまでストーリーが続いている。写真絵本であり他の絵本とは違った印象を受ける。セラミック（陶器）でつくった登場人物や背景を写真に撮ったものであり「本物」らしい質感や立体感がある。手足や体は場面に応じてさまざまに造られているが、顔の表情は1種類で、場面が変わっても表情は同じである。また、セラミック特有の輝きが肌につやをあたえるせいも、老夫婦の顔がまるで若者のようにみえる。

ポプラ社刊は、岩沢・小松崎³⁾による民話絵本選定では5点満点の3点の評価を受けた。その評価理由を「地蔵の描き方が生々しく、石の地蔵というより、人体を感じさせる。絵は、子どものイメージをふくらませるもので、限定するものではない。」としている。地蔵が荷を引く場面ばかりでなく、もちつきのまねをする、良い正月を迎えたなど、読者の想像にまかせるべきところを絵で表現してしまい、昔話の本来もっている「こどもの想像

力を伸ばす。」という機能をそこなっている。はじめに文章が存在し、絵本化にあたって文章の整理をせずに、挿し絵を当てはめて造られたため、ストーリーの展開に対して絵が多すぎる印象を与える。

第一法規刊は、日本の民話絵本第1期10冊中の「かさじぞう」である。各県の民話から取材し「かさじぞう」は、新潟県の民話として刊行されている。原著⁴⁾から絵本化される際に筋が「正月の買い物のために町へ行き、途中で見た六地藏のために笠6つとさらし1反を買う」から「わらぐつを売った代金で笠を買おうとしたが5つしか買えなかった。」へと変更されている。『刊行の言葉』で、「遠い昔から語り継がれた民話は、日本の各地に、同じように花を咲かせながら、摘みとってみれば、一つ、一つ語られた土地の心や色あいがにじんんでいます。このシリーズは根の土を、土着の思いを大切に、県別にまとめてみました。」と述べられている精神と食い違いがみられ、絵本化によって生じた筋の変更は、果たして必要であったのかどうか疑問が残る。

福音館刊は、前述の岩沢、小松崎の選定では、満点の5点に評価されている。理由は、「文もすなおで、民話としての語り口がよい。画面に扇面をおいてその中に描かれた線は、のびやかでやわらかく、色をおさえて簡潔な画面がうつくしい。」である。水墨画特有の線の太さ、墨の濃淡やぼかしが吹雪の様子や雪の質感をうまく表現している。一見、暗く地味だが藍色の和紙の地に扇面を配し、屋外の場面では白で雪国の寒さ・冷たさを、屋内の場面ではクリーム色で暖かさを表現している。松居⁵⁾は、絵について、「白と墨とうす墨のぼかしは、遠近感のない、しかしリアリティーのある不思議な空間をつくりあげていて……(略)……天地も四方も一つにとけあってしまう雪景の不安な白い空間のイメージが感じられる。」「水墨という表現と和紙の素材の白がうまく調和し、水気をたっぷり含んだ雪の感じが見事にえがき出されている。」と述べている。「かさじぞう」は、雪が主要な題材であるから、雪の表現が非常に優れていることは評価の大きなよりどころになる。

Ⅲ. スライドによる調査

極言すれば、絵本は文字がなくとも成立するものといえるように、絵本にとって絵は重要な意味をもつものである。ストーリーは同一であっても絵が変わると、読者が抱くイメージはどのように変わるのであろうか。5つのスタイルを代表する絵本から、ストーリーの展開に欠くことのできない3場面を抽出し、絵の好き・嫌い、ストーリーと絵が合っているか、30の形容詞対に関しての印象について5段階評定調査を行った。

抽出した3場面

- (1) 老夫婦の貧しい暮らしがわかる住まいの内部の場面
- (2) おじいさんが地藏にかさをかぶせる場面
- (3) 地藏が荷を引いてくる場面

1場面に付き10秒、計30秒被験者に見せた後、「かさじぞう」から連想する30の形容詞対を選定し、見た絵の印象を5段階尺度によって評定する調査を実施した。調査の

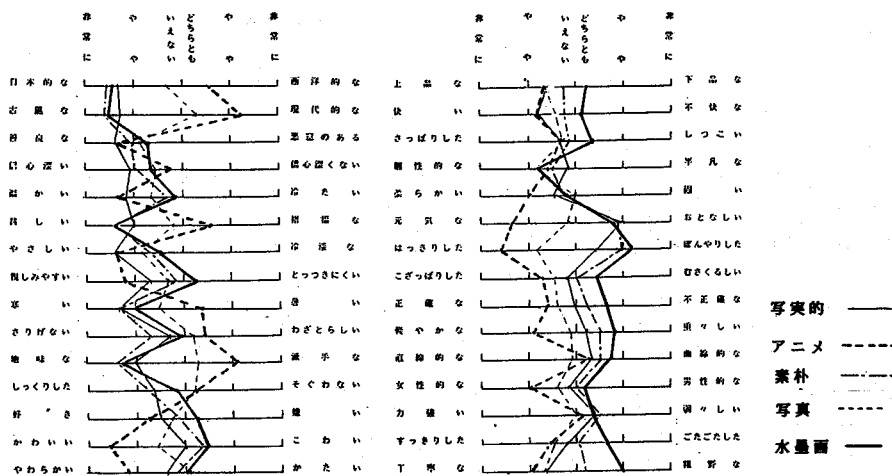
対象は、岩手大学教育学部及び農学部の学生93名(男子43名, 女子50名)と岩手大学教育学部附属中学校の生徒79名(男子40名, 女子39名), 計172名である。

結果及び考察

1. 平均値プロフィールの比較

1) 全体的傾向(図1)

図1 平均値プロフィールの比較(全体)



①写実的に描かれたもの(以下写実と略記)について、1-15の項目までグラフは左寄り、特に1-7は、平均値が4以上と評価が高い。16-30の項目ではほぼ中央に位置している。「おとなしい」、「上品な」、「快い」、「丁寧な」ととらえている。

②アニメ・漫画風に描かれたもの(以下アニメと略記)について、評価が両極端でバラつきがある。「ぜんりょうな」、「温かい」、「やさしい」、「親しみやすい」、「かわいい」、「現代的な」、「派手な」、「元気な」、「はっきりした」ととらえられている。

③素朴に柔らかい色彩で描かれたもの(以下素朴と略記)1-15項目は左寄りに評価され、「日本的な」、「古風な」、「善良な」、「貧しい」、「寒い」、「地味な」という「かさじぞう」としてふさわしい形容詞が選ばれている。

表2 形容詞の分類

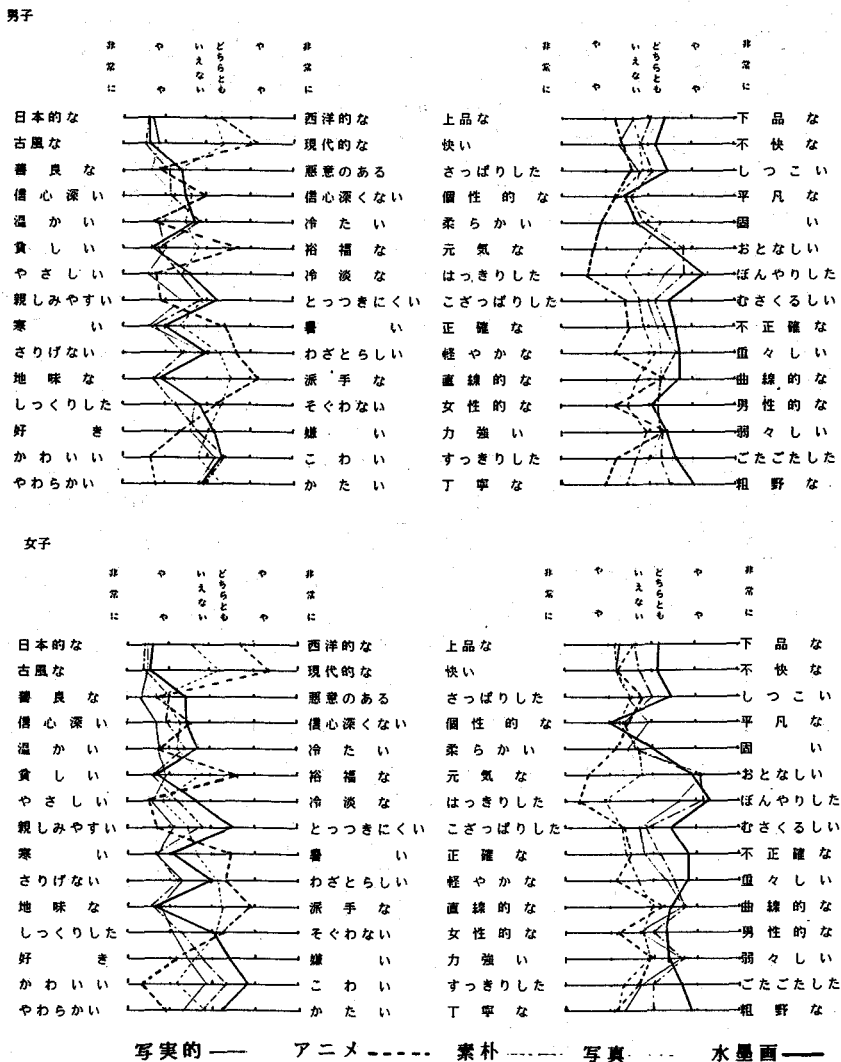
かさじぞうにふさわしいもの	絵本としてふさわしいもの
日本的な	親しみやすい
古風な	さりげない
善良な	好き
信心深い	上品な
温かい	快い
貧しい	個性的な
やさしい	正統な
寒い	丁寧な
地味な	
しっくりした	

④写真撮影のもの（以下写真と略記）評価にバラつきがある。「個性的な」、「はっきりした」が高いのは、写真という絵本には少ない表現の方法やセラミックを使ったところからの影響と考えられる。

⑤水墨画風に描かれたもの（以下水墨画と略記）「日本的な」、「古風な」、「貧しい」、寒い、「地味な」の「かさじぞう」としてふさわしい形容詞が選ばれている。また、水墨画の黒と白のコントラストの強い画面であるのに「ぼんやりした」が高い。

2) 男女別傾向 (図2)

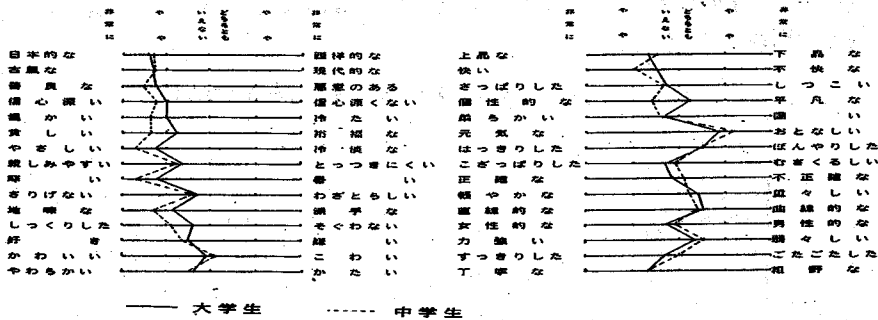
図2 平均値プロフィールの比較 (男女別)



男女間で隔たりの大きかったのは③素朴であった。男子は、「下品な」、「しつこい」、「むさくるしい」、「ごたごたした」、「粗野な」ととらえ、これに対し女子は、「上品な」、「さっぱりした」、「こざっぱりした」ととらえている。④写真も性差は大きく女子の評価が全体的に高い。男子は、「かたい(固い)」、「重々しい」、「直線的な」ととらえ、女子は、「やわらかい(柔らかい)」、「軽やかな」、「曲線的な」ととらえている。男子はセラミック人形の材質に着目し、女子は人形そのもののイメージに着目したと考えられる。

3) 年齢別傾向 (図3)

図3 平均値プロフィールの比較 (写真 年齢別)

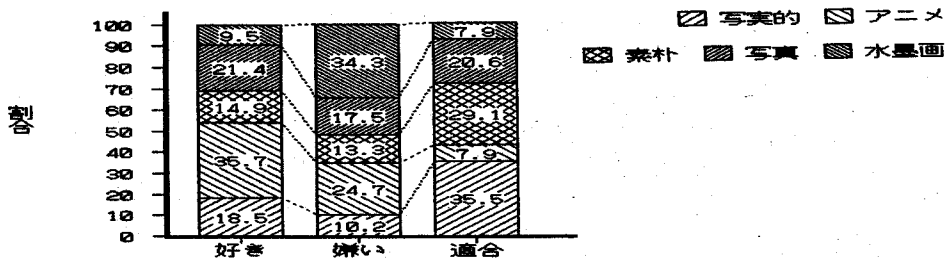


年齢差の見られたのは、①写実である。大学生は「平凡な」ととらえ、中学生は「個性的な」ととらえている。

2. 各々の絵から受ける印象

5種の絵の中から「一番好きなもの」「一番嫌いなもの」「かさじぞうのお話にいちばんあっているもの」を選択させた。

図4 絵のスタイルから受ける印象 (全体)



1) 絵の好み

好きなものを選択されたのは、多い順に②アニメ、④写真、①写実、③素朴、⑤水墨画である。②アニメ、④写真は、図1によると「西洋的な」、「現代的な」、「はでな」としてとらえられており、現在の若い世代は昔話の絵本にも現代的な要素を求める傾向がうかがえ興味深い。

嫌いなものを選択されたのは、多い順に⑤水墨画、②アニメ、④写真、③素朴、①写実である。⑤水墨画は、「とつきにくい」、「こわい」、「下品な」、「不快な」、「しつこい」、「むさくるしい」、「粗野な」ととらえられたことが「嫌い」とされた要因と考えられる。ところで、②アニメ④写真は、「好き」の1、2番目になっているのに、「嫌い」の2、3番目にもなっている。これは、「西洋的な」、「現代的な」、「派手な」という要素が逆に働きかけたためと考えられる。

好みには性差は見られなかった。

大学生が「好き」と選択したのは、①アニメ②写実で（ともに23.7%）好みにはバラつきがみられた。中学生は、①アニメを半数以上（50.7%）が好きとし、⑤水墨画を好きとしたのは0であった。「嫌いなもの」は、大学生、中学生ともに⑤水墨画で、それぞれ30.1%、38.7%である。「下品な」、「不快」、「むさくるしい」ととらえられたことが影響していると思われる。

図5 絵のスタイルから受ける印象（男女別）

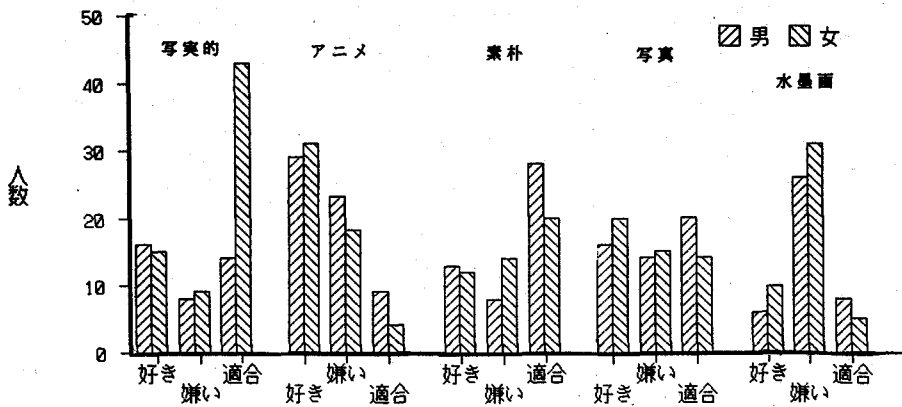
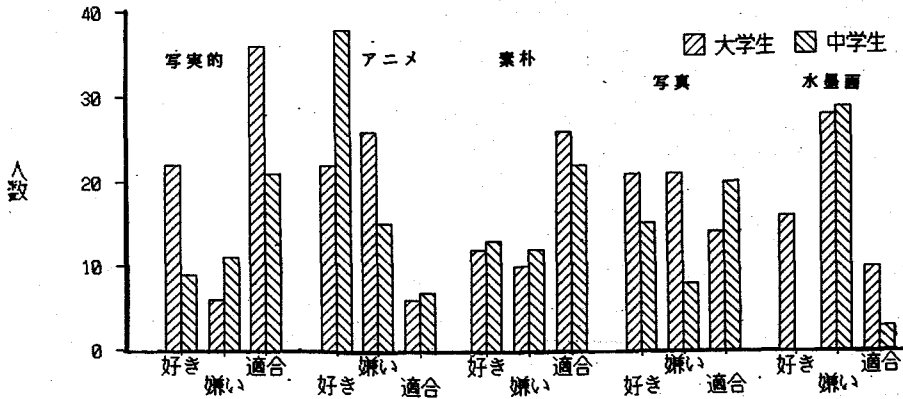


図6 絵のスタイルから受ける印象（年齢別）



2) ストーリーに適合しているか

話に合っているものを選択されたのは、多い順に①写実、③素朴、④写真、②アニメ、⑤水墨画である。①写実、③素朴は、「かさじぞう」のストーリーにふさわしい要素、絵本としてふさわしい要素を持っているので、話に合っていると選択されたと考えられる。

性差に着目してみると、女子が①写実を(50.0%)、男子は③素朴を(35.4%)話にあっていているとしている。

中学生よりも大学生が「好き」なものを「話に合っている」とする傾向が強く、大学生の女子は、5割が「好き」を「話に合っている」としている。

IV. 家庭における読書記録から

調査方法

実際の家庭において「かさじぞう」の絵本がどのように読まれるか、佐々木⁹⁾のおこなった徹底的なケース追跡研究方法を参考に記録調査を行った。5種の絵のスタイル別に選択した絵本を家庭の絵本と同一の場所に置き、子どもの自由な選択にまかせ読書活動を行い記録した。(④写真については、スライド調査に使用したものが絶版になったため写真を媒体としている、横田弘行・文、内山澄子・人形製作、集英社刊を用いた)

被験者は6家庭、記録期間は平成3年7月から平成4年1月まで、記録終了時にスライドによる調査と同様の調査を母親に対して行った。記録は自由に記入することを原則としたが、「子どもがその絵本のどの場面を気に入ったか、日常生活のなかで絵本の内容に関連するどのような発言や行為があったか、父母または家族のものが読み聞かせたとき、どんな表情や発言、行為をしたかなど」を記入時のポイントとした。

1. A君のケース(男児 平成元年11月3日生まれ・記録開始時1歳9カ月)

1) 日常の読書傾向

対象児のなかでは最年少で、調査開始時、絵本はながめたり読んだりするものというよりは、落書きをするなどのおもちゃの一つとして楽しんでいることが多い。

「ベビーブック」(月刊誌・小学館)「いないいないばああそび」「ひとりであちでできるかな」(ともに木村裕一絵文・偕成社)がよく読まれていたが、絵本の世界の中に自分の生活をj確認して楽しむ¹⁰⁾読み方をしていた。開始2カ月後、母親の話しかけによって絵本で行われている活動(「おばけのパーパパパ」アネット・チゾンとタラス・ティラー)を日常生活で再現するようになり、「朝起きたらこの本かベビーブックを必ずひっぱりだし、よる寝る前も必ず手放さない」お気に入りの本となった。

2) 「かさじぞう」の絵本をどう読んだか

②アニメ・・自発的に読む。物語を楽しむより、絵を楽しんでいた。登場人物のゼス

チュアをまねて楽しんでいるが、文章を読み聞かせると話が終わらないうちに、次のページ進んでしまいがちであった。調査の後半になると記憶の発達とともに認知できるものが増え、「これなあに」「これは」「これは」等の質問がよくできるようになった。

3) おかあさんは「かさじぞう」の絵本をどう読んだか

①写実・・・絵や文体に温かみを感じられ、「もちつきのまねごとをする老夫婦の絵」を印象に残ったとし、絵全般について「絵自体で楽しめる」と高く評価している。

②アニメ・・・好き。絵のはっきりしていること、ねずみなどこどもの知っているものがたくさん描かれていること、「チューチュー」「ベッタンベッタン」等の擬声語がこどもに喜ばれることを理由にあげ、こどもの視点から判断している。

③素朴・・・ストーリーに合っている。夜の雪山を背景として小さく家だけをポツンと描いてある場面を「イメージをふくらませて心をとらえた」としている。

④写真・・・リアルだけれど動きのある人形劇をそのまま絵本としたことの違和感を指摘している。

⑤水墨画・・・全体的に版画のようで、人物に表情が乏しいような気がする、特におばあさんの顔がきつそうに見えるとしている。

2. Bちゃんのケース (女兒 昭和63年3月生まれ・記録開始時3歳5カ月)

1) 日常の読書傾向

家庭で絵本のほかに紙芝居が多く読まれている。松居⁸⁾によれば、紙芝居は絵本とは異なったジャンルのもので、簡単にいえば紙芝居はドラマ・演劇であり、絵本は物語であるとしている。家庭環境のなかで2つのジャンルが与えられていることは、非常に恵まれている。

物語の世界に入っていくことがたやすくできることが、読書記録からよくわかった。「よぶごどり」(浜田廣介 講談社のお話絵本館 8)「こねこのしろちゃん」(堀尾青史 童心社)「きんのがちょう」(グリム)では、主人公に自分を同一視して一緒に泣いたり、行動した。

2) 「かさじぞう」の絵本をどう読んだか

②アニメ・・・一番好き。「アニメ化された絵が一番印象に残りやすいらしい。動物達がでてくるのも親しみやすさを増すらしい。」「本が気に入るか否かは、ほとんど主人公のキャラクターを好きになるかどうかで決まる。」と理由を記録している。「文はなかなか長くて、言葉も難しく、ページをめくるのがまちきれないで次々にめくってしまう。」と絵を追いかけていくような読み方をしたようだ。

⑤水墨画・・・一番人気が無かった。「ページをめくっても、場面が変わったかどうかかわからない様子で、どこを見ても同じ絵に見えたらしい。」としている。

3) おかあさんは「かさじぞう」の絵本をどう読んだか

①写実・・・一番好き。「写実的な絵なので、家や老夫婦の様子から貧乏さ加減がわ

かっておもしろい。生身の生活している人間臭さがある。写実的だが柔らかく温かな色調と線を使っているので、信心深く誠実な雰囲気が出ている。文体は完成されていて描写に優れ、五感を刺激されるものがある。」と高く評価しているが、「幼児には無理であろう。」とも述べている。じぞうが荷を引いてくる場面を「ナマナマしすぎて、大人には滑稽だけれど、こどもはそれほどでもないらしい。」としている。

③素朴・・・ストーリーに合っている。「バランスがとれていて、一番無難そうに見える。」「絵がかさじぞうのイメージに近い。」が、「一番印象が薄い」「文章を読んで、少々ゴツゴツした感じを受ける。せっぱつまったり、間延びしていたり、せりふが長かったりして、リズムがないとしている。

④写真・・・「読んでいるとなぜかイメージが壊れてしまう。人形の写真は絵と違ってあいまいさを許さないのだろうか。」また、この絵本のもととなったNHKの人形劇について「近頃のは、軽く、明るく、お笑い風に作ってあるので、余韻・静寂のかさじぞうは、もともとそぐわないのではないかと述べている。

⑤水墨画・・・絵に紺のワクがはめてあったりして紙芝居的要素が強い。読み手が文をこなした上で、紙芝居風に見せれば、少しは、よい反応が得られるのではないかと、という指摘があった。

3. C君のケース（男児 昭和63年6月生まれ・記録開始時3歳2カ月）

1) 日常の読書傾向

仕掛絵本（とびだす絵本、ポップアップ絵本）、月刊誌（「おともだち」・講談社、「めばえ」・小学館）を好んで読んでいる。「絵が美しく、読ませたい童話を選ばれている。」理由から母親が「おはなし絵本館」「おはなし童話館」（ともに講談社）を定期購読しているためか、「ガリバー旅行記」「三びきのくま」「十二月物語」等の物語を好んで読んでいる。日常の読書活動のなかでよく会話がはずみ、読書活動が母子の交流の場になっている。「本の筋はそのまま読まず、絵に合わせて私なりに話してやる。」ことも多い。

2) 「かさじぞう」の絵本をどう読んだか

①写真・・・一番はじめに選ぶ。はじめの5ページほどで興味がほかに移る。

②アニメ・・・同シリーズの本を3冊持っているので愛着を示したが、ねずみが出てくる場面を不思議に感じていた。

③素朴・・・じぞうの数を確かめて満足する。

④写真・・・調査期間中ずっと読まれた。「NHKの教育番組と同じなのを覚えていてか、登場人物が気に入ったのか」一日一回は読まれている。

⑤水墨画・・・「<こどものとも>ならいつも年中版を読んでいるので、内容が易しいのでは」と読み聞かせると最後まで聞き、じぞうが6人いることを1-6まで数えて確かめる。

3) おかあさんは「かさじぞう」の絵本をどう読んだか

①写実・・・ストーリーに合っている。絵は、こどもが理解しやすいと思う。場面を素直に現実化できる。平凡な文でわかりやすいと思う。しかし、個性がない分こどもの気持ちを引きつけにくいと思う。

②アニメ・・・母親自身は好きではない。こども本人は「かわいいと気に入っている。このシリーズに共通してワンパターンだが、こどもは、絵に集中しやすく良いようだ。

③素朴・・・最も好き。絵も文も極端でなく、全体としてよい雰囲気だと思う。

④写真・・・横田さんの文章は癖があるが（繰り返しが多い、ひたすらやさしい）思わず引っ張られてしまう。劇的で、人形にあっていて、生きている。

⑤水墨画・・・絵は個性があり魅力的、1ページ1ページがとてもすてきで、作品のようである。文は、無駄がなく簡潔、せりふの字が大きくなったりしているところの心遣いはさすが<こどものとも>だと思う。こどもがもう少し喜ぶかと思ったが、ほとんど反応を示してくれなかった。

4. D君のケース（男児 昭和62年9月生まれ・記録開始時3歳11カ月）

1) 日常の読書傾向

「ジェットマン」「ソルブレイン」「ウルトラマン」などのいわゆるヒーローものや「アンパンマン」「ドラエモン」のアニメキャラクターが大好きである。絵本の選択は、こども自身にまかせてあるため、自然にこの種のものを選んでしまう。母親は、「童話や昔話のような絵本を読んであげたいのだが、なかなか思うようにいかない。」と述べている。「ファイブマン」の登場人物に家族一人一人を置き換えて話しかけたり、強いヒーローに自分を同一視している。

お話しの絵本に全く興味が無いわけではなく、「しんせつなともだち」（方軼筆作 福音館）は、3カ月ぶりに読んでほしいと持ってきた本である。内容は、わかっているので自分でページをめくり、順をおって母親に話しをしてあげている。

2) 「かさじぞう」の絵本をどう読んだか

①写実・・・前に読んだ③と比べ、違いを指摘しながら3回読んでもらっている。「おじいさんとおばあさんよかったね」と満足そうだった。

②アニメ・・・ねずみが登場するので喜ぶ。最後の場面でたぬきやうさぎ、きつね、くまたちと一緒に食事をしているのを見て、「みんなで一緒に食べていいね。よかったね。」と何度もいっていた。おじぞうさんの中に、こどものおじぞうさんが一人混じっているのがうれしそうだった。

③素朴・・・はじめに選んだ。「としのくれ」「よなべ」「かじかんだ」など聞きなれない言葉に「へんなの」を連発する。

⑤水墨画・・・最も気に入ったもの。「絵がへんだ」を連発しながら聞く。2日後①③⑤の3冊を置いて選ばせたところこれを選ぶ。「どうして?」と聞くと「おばあさんの顔がおもしろいから」と答える。

3) おかあさんは「かさじぞう」の絵本をどう読んだか

①写実・・・やさしい感じの絵で心に残る。ていねいに、細かく描かれている。こどもには、わかりにくい言葉遣いがある。

②アニメ・・・よく見かける絵、マンガっぽく、色がカラフル。

③素朴・・・最も好き。ストーリーに合っている。はっきりとした絵ではないが、なんとなく心に残る。色調は暗いが、おだやかな感じを受ける。民話なので、わかりにくい言葉がある。

④写真・・・人形なので立体感があり、インパクトが強い。顔の表情が変わらないのが残念。文字数が多いが字が大きいので読みやすい。

⑤水墨画・・・色調が暗い、絵が単調だが、心に残る。イメージがふくらむ。文は、簡潔にまとめられている。

5. E君のケース (男児 昭和60年8月17日生まれ・記録開始時6歳0カ月)

1) 日常の読書傾向

昆虫や動植物に興味を示す。「あめが ふったらむしたちは」(いのうえよしお作 文化出版局)「ふゆめがっしょうだん」(写真絵本・長 新太作 福音館)など日常の読書傾向にも表れている。文よりも絵や写真に興味を示し、日常の生活の中で確かめて喜ぶ。

2) 「かさじぞう」の絵本をどう読んだか

②アニメ・・・一番好き。ねずみを見て「かわいい」とななともいう。おじいさんやおばあさん、おじぞうさんの表情など細かいところまで見ている。

④写真・・・絵がちゃんとしている。(リアリティーがあるという意味か?)「かさのわらははどこでとったの」「六じぞうは何年にできたの」というような具体的な質問がでる。

3) おかあさんは「かさじぞう」の絵本をどう読んだか

①写実・・・語り口は自然でよい。表情が優しいので読む側の心がなごむ。絵のインパクトがやや弱い。

②アニメ・・・マンガ的、マンガをよくみている子には親しみやすいだろうと思う。

③素朴・・・一番好き。古風であるが、そこが快い。どこかしら心をひかれるものがある。語り口が自然で、絵とマッチしてよいが、こどもにはとってはやや固い。

④写真・・・ストーリーにあっている。写真を取り入れている絵本はあまり見る機会がないので楽しい。見ていておもしろい。絵と文章の位置がきまっているのでこどもが絵に集中できる。(②との共通点)

⑤水墨画・・・とっつきにくい。方言の語り口調が読みにくい。絵は古風で、日本的という感じはするが、全体的に暗いイメージで、こどもと読み終えた後、心が暖まるというよりは、暗く沈んでしまった感じ。

6. F君, G君のケース (F・男児 昭和60年11月生まれ・記録開始時5歳9カ月)

(G・男児 昭和58年4月生まれ・記録開始時8歳4カ月)

1) 日常の読書傾向

Fは、幼稚園で「かがくのとも」(月刊雑誌 福音館)を定期購読している。科学絵本(図鑑、観察絵本、知識絵本)が大好きである。「どうぶつえんガイド」(あべ弘土作 265号)、「サラダブック」(平野レミ作 268号)、「ふんちゅう」(吉谷昭憲作 233号)以上かがくのとも 福音館)などが読まれている。文字を読めるようになってきたので、兄のGと拾い読みをしている。細かい字の解説まで省略せずに読むのは、母親が読み聞かせをするときも同様。

2) 「かさじぞう」の絵本をどう読んだか

①写実・・・Fは無関心。Gは、母親が「これが(教科書と)同じ本だよ」と教えると、Fに読み聞かせた。他の本にも目を通し、「へえ、同じ話なのにちがうんだね。」と関心を持つ。

②アニメ・・・一番好き。

③素朴・・・「一文(いちもん)」などの言葉がわかりにくく問い直す。

④写真・・・「これは本物だ」といいながらページをめくり確認する。絵で表現したじぞうには「これなあに」と質問する。

3) おかあさんは「かさじぞう」の絵本をどう読んだか

①写実・・・一番好き。ストーリーに合っている。美しく、昔の生活の様子もよくわかる。雪のシーン等本当に寒そうに見える。絵がはっきりしている。文は、読みやすく柔らかい。

②アニメ・・・現代版かさじぞう。かわいいとは思いますが、日本の昔話のイメージからはずれてしまう。こんな話しあったかな、と戸惑う部分がある。

③素朴・・・北陸地方のような、くらい冬景色が思い出され、果てしなく広がる冬景色が想像できる。いまのこどもにイメージがわかどうかは疑問。わらぐつを作ったところがひっかかる。売った代金でわざわざかさを買ってかぶせるなんてこころまでは出来ないと思う。

⑤水墨画・・・好きではない。当時の貧しさがよく出ている絵だと思う。色彩がなく、人物の表情に変化がない。

V. 考察

1. なぜアニメ風の絵が好まれたのか

スライドによる調査、家庭における読書記録による調査でも「一番好き」と選択されたのは、②アニメであった。他のものに比較すると(1)輪郭が黒でふちどられ、描かれた対象が明確である。(2)色彩が鮮明で、意識的に補色関係が使用され、読者を引きつける。(3)老夫婦や擬人化された動物達が頭でっかちの二頭身ないし三頭身に描がかれている。(4)物語に関係の無い動物達が半分以上のページに登場する。の特徴をあげることが出来る。この特徴は、佐々木¹⁰⁾が「宇都宮図書館」で三歳位までのこどもを対象とした『赤ちゃん絵本』の中でよく借りられる本の共通の特徴、(1)絵の輪郭がはっきり

としていて、背景はいずれも白抜きであり、かかれた対象がクッキリと浮かび上がるようになっている。(2) 描かれた登場人物や動物が二頭身ないし三頭身である。と一致する。

幼児にとって視線を集中させる工夫は大切で、それによって全体像を把握したり、形を見分けることが容易になる。また、この絵本は、黒の輪郭線はクレヨンで描いたようなかすれた柔らかい線になっており、濃い線の強さ・硬さ・冷たさにはなっていない。また、二頭身ないし三頭身に描くことは、「人が幼児の体型の特徴をしめしている頭部を好む傾向を持つということは、受け入れられる理論である。」「大人にもこの幼児体型の特徴を強調して描いたもののほうが、リアルに描いたものより人気がある。」という、カスタムやローレンツの説¹¹⁾から考えてみても幼児はもちろん、中学生、大学生にまで一番好まれた理由として考えられる。

登場人物や動物の顔が正面を向いている場面が多く、表情は幼児的である。読者としての幼児は、描かれている対象の中に自分と同じ表情を見つけると、情緒的共感を持ち絵に引き込まれていく。ストーリーに無関係なうさぎやりすを画面に登場させることも動物が大好きな幼児の心を捕らえる。「かわいい」という大人にも共通な情緒性もみだすことになる。表情が幼児的に漫画風に描かれた絵本は、理解しやすいが、あくまでも「泣く」「笑う」という人間の基本的感情の部分に留まるもので、それよりも深い感動や心理を伝えることは出来ない。「こどもが好むから」、「こども向きでかわいいから」という理由からいつも同じスタイルで描かれた絵本を与えられていたら、感受性や情緒の発達を阻害する危険性を含んでいると考えられる。同様のことは、表情に変化の無い人形によって構成された写真絵本にもいえる。

2. 昔話絵本としての「かさじぞう」か、こどものための絵本としての「かさじぞう」か

本研究の始めの段階で「かさじぞう」が昔話であることを前提として、絵のスタイルを5種に分類し、代表する絵本を分析し比較検討した結果、総合的に水墨画風に描かれたものを優れた絵本であると判断した。しかし、スライド調査や家庭における読書記録調査では水墨画風は他のものより嫌われる傾向がつよく、ストーリーとの適合性も低かった。

筆者が1989年に行った調査¹²⁾では、大学生女子34名に今回使用した形容詞対とほぼ同様の形容詞群から「かさじぞう」のストーリーのイメージに適合するものを3つ選択させた結果は、上位から「親しみやすい」(32名)、「快い」(22名)、「好き」(15名)、「柔らかい」(13名)となった。また、実際の絵本からイメージに適合する絵本を選択させた結果は、写実的(10名)、素朴(9名)、アニメ・漫画風¹³⁾(7名)、写真(5名)、水墨画風(3名)であった。選択の理由を自由記述させたところ、数の多い順に「優しいおじいさん」「明るい」「親しみやすい」「こどもが好きそう」「かわいらしい」となり、ストーリーのイメージに適合する形容詞の選択と一致した。

ストーリーとの適合性の高さは、「かさじぞう」としてふさわしい形容詞よりも好ましい絵本を代表する形容詞が強く影響していることがわかる。「かさじぞう」のストーリーは「親しみやすく」「快い」ので「好き」だから、絵本についてもストーリーが持っている雰囲気表現しているものではなく、「親しみやすく」「好き」なものを良いと考えたのであろう。雰囲気を良く表現していると考えられる、水墨画のものは色調が暗く地味な

ので「とっつきにくく」良い評価を得ることは出来なかった。

家庭における読書記録調査でも母親の選択理由は、「一番無難そうに見える」「極端さが無い」「平凡」「中間くらいをいっている」であり、極端に個性が強いものよりも、無難で平凡なものを絵本を与える側は選ぶ。「〇〇のお話し」をこどもに与えるのための媒体として最もふさわしい児童文化財の一つとして「〇〇の絵本」を見いだすのではなく、「こどもに与える絵本は、無難で、親しみやすく、快いかわいらしいものがよい。」という大前提を置きその上で個々の絵本を選択しているのではないだろうか。

「かさじぞう」は、小学二年生の国語教材として多くの教科書に掲載されている。そのため、昔話が家庭で語り継がれることが少なくなった現在でもこの話を知らない人はほとんどいない。実際、今回の被験者は、全員が知っていた。知っているからには、それぞれが固有のイメージを持っているはずである。リリアン・H・スミス¹⁾は、「子どもの頃の印象は永続する。そしてこの印象が蓄積されて、成人したときに現れる人格の型(パターン)となる。そうであるとすれば、まさに『子どもはおとなの父』のことわざどおりである。こう考えてくると、私たちは、子どもが読書から受ける印象に無関心でいてもいいものだろうか？」と述べているように、安易な絵本の選択は、こどもの想像性を伸ばすマイナスの要因になりうる。

今回の研究において、昔話「かさじぞう」の絵のスタイルに着目し、イメージ形成にどのように働きかけるのかを考えてきた。従来、絵本の絵は、「挿し絵」として文章との関連や、色彩、芸術性に着目して、「読者にどのように読まれるか」ではなく、「絵本」という一つの対象として評価したり、論じられることが多かった。絵本の絵の質によっては読者であるこどもにとって想像の世界へ入っていくための入り口にも、入っていくことを阻む厚い壁にも成り得る。子どもは主に絵本を自分で選ぶというよりは大人によって選択されたものを与えられる側にいる。選択をして子どもに与える側の大人は、安易に選ぶのではなく責任を持って選択できるような確かな判断力が要求される。

本研究を行うにあたり、絵本の分析評価・調査記録にご協力いただいた岩手大学教育学部家政科平成3年度卒業生、小原 励氏、松川 美華氏に厚く御礼を申し上げます。また、スライド調査にご協力いただいた岩手大学教育学部・農学部の学生の皆さん、岩手大学教育学部附属中学校1年C・D組の生徒の皆さん、長期間にわたって読書記録をお願いした各家庭のおかあ様方に御礼申し上げます。

VI. 引用文献及び註釈

- 1) 佐々木宏子・宇都宮絵本図書館編著：「幼児の心理発達と絵本」 れいめい書房 p13, 189 (1984)
- 2) 阪本一郎：「絵本の研究」 日本文化科学社 p140-148 (1977)
- 3) 岩沢文雄・小松崎進共編：「民話と子ども」 文化書房博文社 p53, 62-67, 77 (1983)
- 4) 水沢謙一：「トントン昔アッタテンガー -新潟市の昔話集-

野島出版 (1983)

- 5) 松居 直:「絵本をみる眼」 日本エディタースクール出版部 p60-61, 118 (1978)
- 6) 佐々木宏子・宇都宮絵本図書館編著:前掲書1)
- 7) 佐々木宏子:「絵本と想像性」 高文堂出版社 p42, 68, 77-78, 95 (1975)
- 8) 松居 直:「絵本とは何か」 日本エディタースクール出版部 p8-9 (1973)
- 9) 福音館版「かさじぞう」は、月刊誌「こどものとも」として1961年出版された後、1966年こどものとも傑作集に収録されハードカバー化された。
- 10・11) 佐々木宏子:「赤ちゃん絵本」『日本児童文学』1979年7月号, p72-73
- 12) 詳細は「現代におけるイメージ形成・伝承に関する研究-童話教材の『語り』およびそのさし絵の分析を中心に-」昭和62-63年度 文部省科学研究費補助金一般研究 (B) 研究報告書を参照されたい。
- 13) 当時使用した絵本は、ひかりのくに版(青木みのる絵, 大内曜子文)であったが、主人公が若夫婦として描かれていたため変更した。
- 14) リリアン・H・スミス:「児童文学論」 岩波書店 p11-12 (1964)